

「種蒔く人のたとえ」

§064 マコ4:3~23、マタ13:3~23、ルカ8:5~18

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ベルゼブル論争以降、イエスの奉仕の方法が変化した。
- ②イエスは、大衆伝道から弟子訓練に方向転換した。
- ③イエスの奇跡は、弟子訓練のためのものとなった。
- ④イエスの教えは、たとえ話を中心となった。

(2) 「奥義としての王国」に関する9つのたとえ話

- ①種蒔く人のたとえ (詳細な解説がある)
- ②種のたとえ
- ③毒麦のたとえ (詳細な解説がある)
- ④からし種のたとえ
- ⑤パン種のたとえ
- ⑥畑に隠された宝のたとえ
- ⑦高価な真珠のたとえ
- ⑧網のたとえ
- ⑨一家の主人のたとえ

(3) これらのたとえ話を解釈する際の原則

- ①イエスが弟子たちに、「奥義としての王国」の進展について教えた。
- ②多くの象徴が用いられているが、その大半が旧約聖書ですでに用いられていた。
*その場合は、その解釈をそのまま採用する。
- ③新しく登場する象徴は、イエス自身が解説される。

(4) A. T. ロバートソンの調和表

「最初の主要なたとえ話群」 (§64)

2. アウトライン

- (1) 種蒔く人のたとえ (3~9節)
- (2) たとえ話で語る理由 (10~13節)
- (3) 種蒔く人のたとえの解説 (14~20節)

3. 結論：私たちへの適用 (21～23 節)

このメッセージは、種蒔く人のたとえを理解し、適用するためのものである。

I. 種蒔く人のたとえ (3～9 節)

1. 最も重要なたとえ話である。

(1) 注意を喚起する言葉が、最初と最後に出て来る。

「よく聞きなさい」(3 節 a)

「耳のある者は聞きなさい」(9 節)

(2) その理由

- ①種蒔く人のたとえが、最も重要なものである。
- ②意味は鮮明ではないが、そこには深い真理が隠されている。
- ③霊的真理に関心を払って聞くなら、理解できるようになる。

2. 4 種類の土地

(1) 道ばた (3b～4 節)

「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、種が道ばたに落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった」

- ①ある種は道ばたに落ちた。
- ②マコ 2 : 23 には、麦畑の中にある道が登場する。
「ある安息日のこと、イエスは麦畑の中を歩いて行かれた。すると、弟子たちが道々穂を摘み始めた」
- ③人が歩いた結果、踏み固められた道である。
- ④その種が地中に根を張ることはない。
- ⑤その種は、鳥の餌になる。

(2) 岩地 (5～6 節)

「また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったため、すぐに芽を出した。しかし日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった」

- ①ある種は岩地に落ちた。
- ②見た目には他の地と変わらないが、土壌が薄い。
- ③石灰岩の地層の上に、土壌が薄くかぶさっている状態である。
- ④この地層では根は深く張ることができない。
- ⑤日が上ると、枯れてしまう。

「種蒔く人のたとえ」

(3) いばらの地 (7 節)

「また、別の種がいばらの中に落ちた。ところが、いばらが伸びて、それをふさいでしまったので、実を結ばなかった」

- ①別の種は、いばらが群生する地に落ちた。
- ②いばらには生命力がある。
- ③いばらは、他の植物が必要とする水や光をさえぎり、それらをふさぐ。
- ④その結果、いばらの中では実を結ぶことができなくなる。

(4) 良い地 (8 節)

「また、別の種が良い地に落ちた。すると芽ばえ、育って、実を結び、三十倍、六十倍、百倍になった」

- ①良い地に落ちた種は、実を結ぶ。
- ②当時のパレスチナでは、10 倍の収穫があれば、良い収穫とされた。
*種を1粒蒔けば、10粒の収穫がある。
- ③30倍、60倍、100倍の収穫は、大収穫である。

II. たとえ話で語る理由 (10～13 節)

1. 弟子たちの疑問 (10 節)

「さて、イエスだけになったとき、いつもつき従っている人たちが、十二弟子とともに、これらのたとえのことを尋ねた」

(1) 質問したのは、12 弟子と他の信者たち

- ①イエスが急にたとえ話で教えるようになったので、説明を求めた。

(2) 質問の内容

- ①たとえ話全般について (10 節では複数形である)
- ②特に、種蒔く人のたとえ (13 節では単数形である)

2. イエスの答え (11～12 節)

「そこで、イエスは言われた。『あなたがたには、神の国の奥義が知らされているが、ほかの人たちには、すべてがたとえで言われるのです。それは、「彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため」です』」

(1) 3つの理由 (前回すでに学んだ)

- ①群衆から、真理を隠すため。

*彼らはすでに、多くの特権に与ってきた。

「種蒔く人のたとえ」

- ②弟子たちに、真理をより詳しく教えるため。
- ③メシア預言の成就のため。

(2) 「神の国の奥義」(チャート参照)

- ①私たちはこれを、「奥義としての王国」と呼んだ。
- ②ユダヤ人たちがイエスを拒否して以降登場した御国である。
- ③イエスを信じる者は、霊的な意味ですでに御国に入っている。
- ④しかし、王であるキリストが地上にいない間は、「奥義としての王国」である。
- ⑤それは、信者と未信者をともに含む概念である。
- ⑥「奥義としての王国」は、普遍的教会と同じではない。
- ⑦普遍的教会は、その中に含まれる。
- ⑧「奥義としての王国」は、ユダヤ人たちがイエスを信じる時まで続く。
- ⑨つまり、一連のたとえは、メシアが再臨するまでの地上の状態を教えている。

3. 種蒔く人のたとえの重要性(13節)

(1) 訳文の比較

「そして彼らにこう言われた。『このたとえがわからないのですか。そんなことで、
いったいどうしてたとえの理解ができれば』(新改訳)

「また、イエスは言われた。『このたとえが分からないのか。では、どうしてほかの
たとえが理解できるだろうか』(新共同訳)

(2) イエスは、弟子たちの無知に驚かれた。

- ①種蒔く人のたとえは、最も単純である。
- ②と同時に、これが他の8つのたとえ話を解釈する土台となる。
- ③もしこれが分からないなら、より複雑なたとえ話が分かるはずがない。

(例話) 数独の上級本

III. 種蒔く人のたとえの解説(14~20節)

「種蒔く人は、みことばを蒔くのです。みことばが道ばたに蒔かれるとは、こういう人たちのことす——みことばを聞くと、すぐサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。同じように、岩地に蒔かれるとは、こういう人たちのことす——みことばを聞くと、すぐに喜んで受けるが、根を張らないで、ただしばらく続くだけです。それで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。もう一つの、いばらの中に種を蒔かれるとは、こういう人たちのことす——みことばを聞いてはいるが、世の心づか

いや、富の惑わし、その他いろいろな欲望が入り込んで、みことばをふさぐので、実を結びません。良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちです」

1. 象徴的言葉

(1) 種とは、みことばのことである。

①イエスがそれを解説された。

(2) 種蒔く人が誰かは解説されていないが、それは容易に推察される。

①イエスご自身

②イエスの代理人としての弟子たち

③奥義としての御国に住むすべての信者たち

2. 4つの土地の意味

(1) 道ばた

①不信仰な人の応答

②福音を聞いても、信じないことを選ぶ人たち。

③福音の真理は、自分の生活には無関係であると考える人たち。

④鳥=サタン

(2) 岩地

①この人たちは信じるが、みことばに根差した信仰を持たない。

②信者ではあるが、みことばの乳から堅い肉に進もうとしない人たち。

③体験主義的信仰が中心で、みことばの真理を学ぼうとしない人たち。

④困難や迫害が来ると、容易につまずく人たち。

(3) いばらの地

①この人たちは信じるが、霊的勝利を自分のものにできない。

②みことばを知っているかもしれないが、それを自分の人生に適用できない。

③信仰生活と、この世の生活とが、別区分になっている。

④信仰以上に大切にしている偶像がある。

*富、健康、快樂、名声、幸福

⑤(2)と(3)の信者は救われているが、霊的成長を経験しない。

(4) 良い地 (8節)

①みことばに根差した信仰を持つ人たち。

- ②聖書研究をし、その結果学んだ真理が、自分の判断と行動の規準となる。
- ③彼らの存在は周りの人たちに良い影響を与、多くの魂が救いに導かれる。

結論：

1. 奥義としての王国は、永遠ではなく、一時的なものである。
 - (1) ユダヤ人たちがイエスを拒否した結果入って来た、中間期である。
 - (2) 旧約聖書には預言されていなかったのので、「奥義」という。
2. 奥義としての王国は、信者と未信者を含む。
 - (1) 本物の信者と、偽物の信者が同居している。
 - (2) 教会レベルでも、同じことが言える。
 - (3) さらに、異端の出現も予想されている。
3. 奥義としての王国は、教会（普遍的教会）とは区別されるものである。
 - (1) 教会はその一部である。
4. 奥義としての王国の特徴は、福音の伝達が行われることである。
 - (1) ユダヤ教には、宣教師はいない。
 - ①異邦人がユダヤ人のところに来るという考え方がある。
 - ②求心力的伝道
 - (2) キリスト教は、その最初から伝道的である。
 - ①種蒔く人のたとえの通りである。
 - ②遠心力的伝道
 - (3) しかし、福音に対する応答は、さまざまである。
 - ①種蒔く人のたとえは、4種類の応答が起こることを教えている。
5. 福音の真理を知った者には、それを伝える責務がある。

「また言われた。『あかりを持って来るのは、柵の下や寝台の下に置くためでしょうか。燭台の上に置くためではありませんか。隠れているのは、必ず現れるためであり、おおい隠されているのは、明らかにされるためです。聞く耳のある者は聞きなさい』」(21～23節)

 - (1) 「あかり」とは、福音の真理である。
 - (2) それを燭台の上に置くのが、私たちの使命である。
 - (3) 私たちの働きが忠実なものであったかどうかは、終わりに日に明らかになる。
 - (4) 私たちの責任範囲は、種を蒔くところまでである。